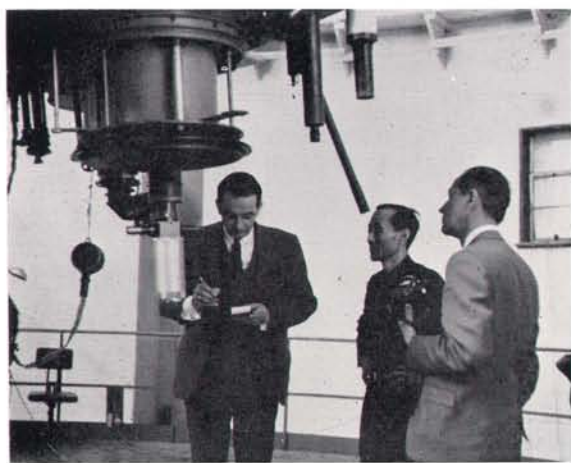


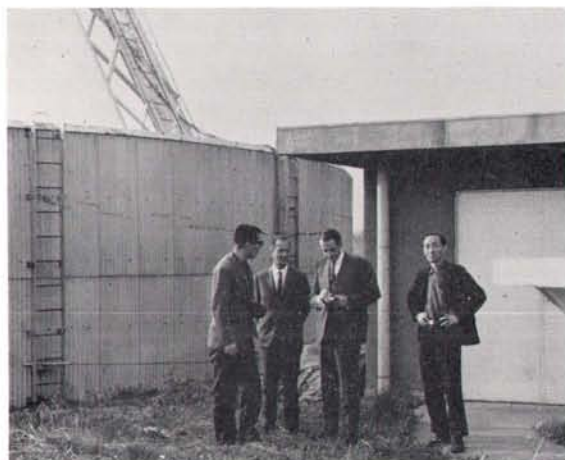
月報アルバム

海外からの来訪



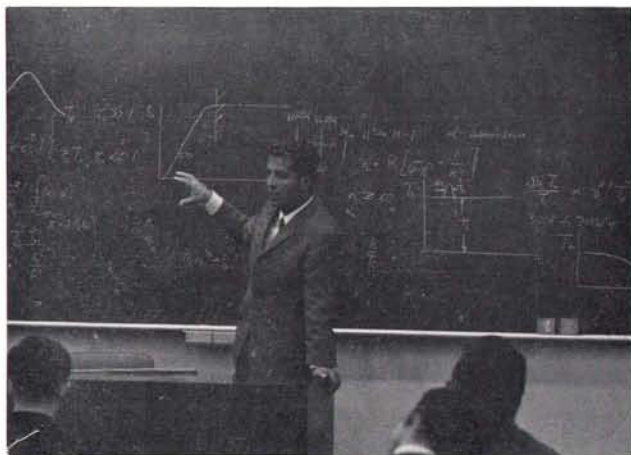
王立カナダ天文学会会員のデュマ (J. A. Dumas), ブレイン (A. Blain) 両氏—ともにモントリオールのダウ・プラネタリウム職員—は、日本天文学会の事業活動やアマチュア天文グループの動向について取材のため、4月9日本会を訪問された。写真は本会訪問後、東京天文台の観測施設を見学された時のスナップである。

(上) 65センチ屈折望遠鏡のドーム内にて、
左より デュマ氏、大沢副理事長、
ブレイン氏。



(下) 25m電波球面鏡観測室入口にて、
左より 守山理事、ブレイン氏、
デュマ氏、大沢副理事長。

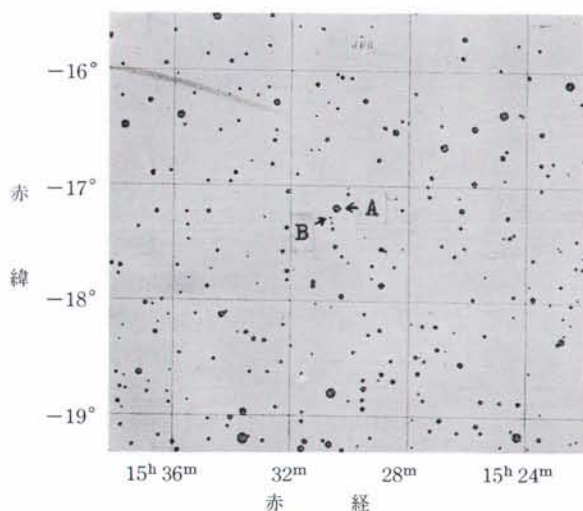
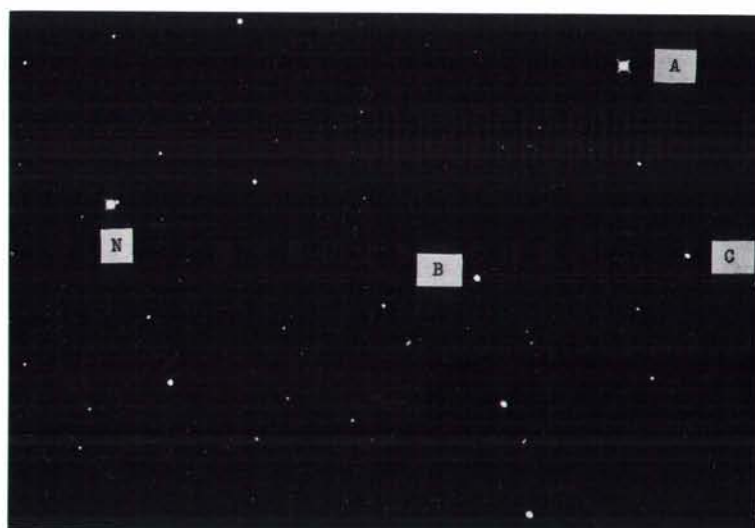
アメリカ国立電波天文台のメッガー氏 (P. G. Mezger) は4月10日に来日し、東京天文台で銀河系 H II 領域について講演を行なった。その後、名古屋大学空電研究所や京都大学などを訪れ、14日にオーストラリアのシドニーに向って離日した。同氏は電離領域の 109α 線 (5007 MHz) の観測で有名で、シドニーでは64mのアンテナで南天の 109α 線の観測を行なう予定である。



海王星による星の掩蔽

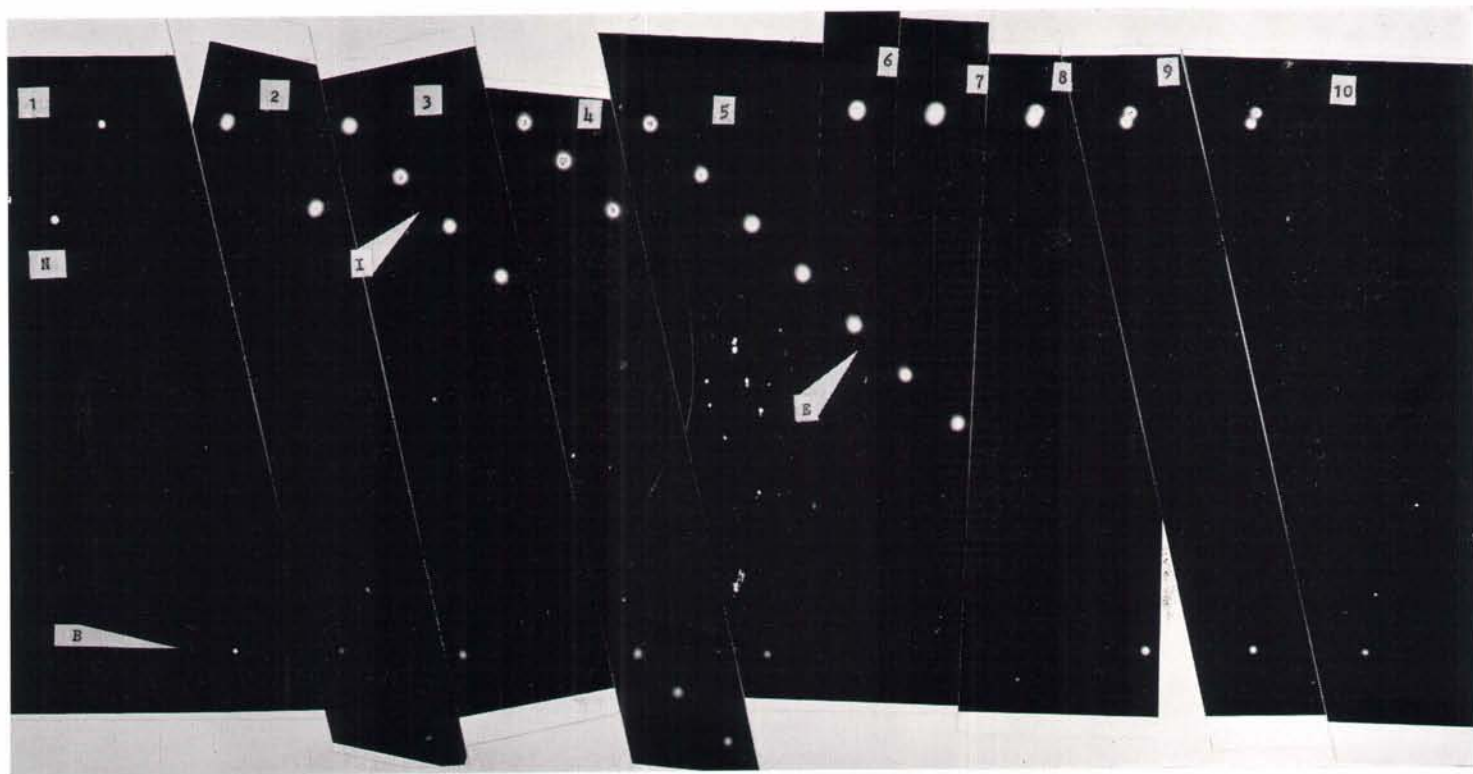
4月8日の海王星による HD139409 の掩蔽は、岡山天体物理観測所では、188 cm 望遠鏡ではニュートン焦点での直接写真、91 cm 望遠鏡では光電測光観測を行なった。直接写真では、ニュートン焦点に一眼レフのボディを固定し、連続撮影を行なったが、特に掩蔽の時刻をはさんで4月8日0時30分より、2時までの間は、1コマにマイクロメーター赤緯方向2ミリ移動で10露出を、各30秒毎に20秒間づつ行ない、1時間半の間に180露出をくりかえした。測光観測の結果では掩蔽の減光および復光はそれぞれ30秒以上つづいた。

当夜はやや Hazy であったが、星像はきわめて尖鋭で、掩蔽の間は断雲の出現はなく、両観測とも成功であった。(G)



ボ
ン
星
図

上の写真は1968年3月28日の海王星(N)、AはBD-17°4388で掩蔽された星、BはBD-17°4392、3月28日3時48分~53分、188 cm 反射望遠鏡ニュートン焦点で撮影。フィルムは103aO、フィルターはHoya L39、5分間露出。左のボン星図と対照されたい。



海王星掩蔽の各相

海王星による掩蔽の各相で撮影した写真を並べたものである。(1)は4月7日(前日),(2)以下は4月8日(当日)に撮影したもの。(2),(3),(4)は左上から右下へ,(5)は右下から左上へ時間を追って並んでいる。

- (1) 4月7日2時30分,海王星(N)はかなり離れている(露出60秒)。(2) 露出 No. 9, No. 10 (左上,4月8日0時34.5分),
 (3) 露出 No. 53 (左上0時56分), No. 54, 潜入(I), No. 55, No. 56, (4) 露出 No. 91 (左上1時15分), No. 92, No. 93,
 (5) 露出 No. 143, No. 144, 出現(E), No. 145, No. 146, No. 147, No. 148, No. 149 (左上1時44分),以上露出各20秒
 (6) 2時00分(露出30秒),(7) 2時40分(露出30秒),(8) 3時10分(露出30秒),(9) 3時30分(露出30秒),
 (10) 3時51分(露出30秒),188cm反射望遠鏡ニュートン焦点で撮影,フィルム103aO,フィルターHoya,L39.